

フランスの革命運動 一八一五―七一(五)―二

ジョン・プラムナツツ
高村 忠 成 (訳)

第五章 第二帝政(二)

第一節 抑圧の年

第二節 共和派の復活

第三節 農にかかり負傷した帝政

※以上前号

※以下本号

第二節 共和派の復活

(一) 一八五七年の選挙

静寂と地下活動は、一八五七年まで続いた。その年の選挙は、共和派の復活の開始、すなわち、共和派がフランスの公共の問題に復帰し始めたことを示した。彼らは一八四九年以後、自分たちが思っていた以上に強力になっていた。しかも、一八五七年以降、彼らはたんに強くなっただけではなく、これまで以上に自分たちの力を意識するようになったのである。

選挙で七人の共和派が復帰した。パリで五人、地方で二人である。ただ直後に、彼らの一人が政府側に転じ、他の三人が議席を放棄してしまった。続く補欠選挙で、二人が当選したので立法院での共和派の勢力は五人となった。五人の議員、すなわちファブル、オリヴィエ、ピカール、ダリモン、ヘモンは六年間、フランスの共和派から信任を受けた彼らの代弁者となった。彼らの存在の重要性は、五議席分以上のものがあった。というのは、共和主義は立法院にはほんの僅かの議員しか有していないということがよく知られており、その五人は、自分たちの選挙区で理解されているよりはるかに多くのことをフランスのために行ったからである。しかもそのうえ、すべての代議員の中で、彼らだけが権力に対して阿なかつたからである。

勇気と自立性がつねに尊重されるフランスのような国においては、こうした姿勢は重要な道義的財産である。ただ五人の共和派の議員は嫌われ、疑われ、罵倒された。だが、人民は彼らの意見には耳を傾けた。というのは、人々は、彼らが言ったことは、彼らの票よりもはるかに重みがあるということを知っていたからである。

一八五七年まで、共和派と社会主義派が主に行ったことは、互いに励まし勇気づけあったことであり、また、自分

たちの知人で、信頼できる人々の間に味方を増やしていったことである。一八五七年から六三年までの間に、彼らは再び主導権を握った。ただ彼らは、政治の分野においてよりも、むしろ学問の分野で主導権を発揮した。

(二) 出版活動

彼らは出版活動を再開し、それは自分たちの気づかない人々に影響を及ぼし始めた。一八五八年、プルードンは彼の偉大な作品、『革命と教会における正義』を発刊した。その中で彼は、「正義と宗教は和解できない。正義を愛することはすべての徳の源泉であり、彼が人間の尊厳と呼ぶものこそ万物の中で至高のものである」、そして、「その尊厳性を、つねに、一所懸命、もし必要ならば自分自身を傷つけても、守ろうとすることが実質的な正義なのである」ということを教えた。正義についてのこの説明は、暗に社会的平等ということ、すなわち、既存の秩序の転換を意味している。

しかし、プルードンが最も賞賛したこと、最も熱心に讚美したことは、個人の尊厳と各人の政治的、知的、経済的、道徳的自由権であった。彼は、正義についてのこの理想は、フランスの革命家やドイツの哲学者たちの情熱をかきたてたと思った。プルードンは、一九世紀のジャコバン主義を認めていなかった。彼から見れば、それはたんなる扇動的行為であり、一七九三年のジャコバン派の物真似でしかなかった。彼の教説のこうした面や、外国の自由派にかわって干渉めいたことをすることを彼が拒否したことは、多くの共和派の怒りを買うことになった。

彼の著作に対しては、つねに厳しい批判が加えられた。彼が熱意をもって取り組むことには、すべて非難の刃が向けられた。しかし、プルードンの影響力は他の追隨を許さなかった。一八四八年以前においては、初期社会主義の理論家たちのもっている狂信性や安易な楽観主義、阿った情熱的な勧告などは、大きな魅力となっていた。そうした中において、プルードンの理論は、¹⁾難解だが結論的には悲観的ではなく、道徳的で啓発力に満ちており、それは、一八

四八年当時の人々が彼らの感情を彼らとともに持ち去ってしまったということをよく知っている世代に、ぴったりと符号した。

ヴァシユロの『民主主義』とジュール・シモンの『自由』（一八五九年）は、ブルードンの『革命と教会における正義』と同じ位、当時の人々に愛読された。この三冊の本は、他のどの書物よりも、共和派の新しい知的攻撃力となった。これらの書物は、体制を直接批判し、体制に動揺を与えた。他にも書物はあったが、それらは当面する社会に対する関心は弱かった。とはいえ、長期的に見るとそれらの書物も、体制にとって危険でないとはいえなかった。

エドガー・キネは、最初のフランス革命についての歴史書を発刊した。その中で彼は、ジロンド派を擁護し、ジャコバン派を非難した。彼の著書は、フランス大革命史を著しロベスピエールと山獄派を賞賛したミシュレの書物に対する返答であった。それは絶対主義的な政府にとっては、耳ざわりな議論をむし返すことになった。人々がその議論をすると、すべての仮定がボナパルティズムに対する非難になってしまうのである。

ミシュレの『フランス革命史』は、一八四七年から一八五一年の間に発刊された。それは、一九世紀中に書かれた革命史についてのあらゆる書物の中で、共和派の人々の主張に最も大きな影響を与えた。

ミシュレは、「民衆」のことを神秘的な恐るべき力をもつ存在といった。それは、いつもそこにいるのだが、つねに見えるとはかぎらず、いつも正当なのだが、容易に理解されるということがなかった。ミシュレは、民衆とは歴史の名優である、と論じた。それは、じつに変幻自在で超人的であった。ただ、その本質は確定し難く、自分の言語をもたず、行動を予測するのは困難であった。単純だが深みがあり、すべての徳を付与されていた。

ミシュレは、民衆にさらに次の性格をつけ加えた。忍耐、純朴、勇氣、不屈の精神、太っ腹、そして知恵——これらは、精神と道徳的訓練の結果、おそらく一万人のうち一人がやっと手にすることのできる特質の合計である。

ミシュレは、当時のフランスで靈感を受けた偶像崇拜者であった。彼がつくった偶像は、「民衆」というものに対

する最も印象的なイメージであり、それは、共和派の偉大な英雄という印象を与えた。その英雄のために、共和派は、自分たちの勇氣と献身の度合いに応じて、自らを犠牲にした。

フランスの知識人たちは、最後はドイツ哲学に注目し始めた。カントの研究と、そこから派生した新カント派の運動は、社会的道徳的な問題についての議論を、これまでよりも正確かつ厳格に行った。リトレや実証主義者たちは、自分たちの哲学がフランスの伝統に根差しているものでありながら、フランスの知的生活に右記したようなドイツ哲学的な影響を及ぼした。感情を殺し、学識を積み、哲学的になり（過酷なほど形而上学的か、もしくは挑戦的なほど実証主義的であるにせよ）、宗教と教会に敵対的であること、また、仮説を除いてすべてのことを二度見ること、そして、極めて批判的で、冷淡なほどドグマを重んずることが流行となった。何人かの作家たちですら、自分たちの知識で読者を脅し、仰天させ圧倒させた。それはまるで、氣転、風情、優雅などの特質をフランス人はもはや必要としないかのようにであった。当時、生物学が目を見張る勢いで進歩していた。そのため歴史学をはじめ他の分野の人々、学生そして社会も、しきりに自分たちもまた科学者になろうとしたのである。

(三) ブランキ主義者

この知的な流行を最も熱心に受け入れたのは、ブランキ主義者であった。彼らは当時広まっていた奮闘気に圧倒されており、自分たちの存在を正当な形で証明するのが自分たちの義務である、とした。同派の哲学者、あるいは歴史家は（それはあまり重要ではない）、トリドンであった。『エベール主義者』についての彼の本が、一八六三年に発行された。ブランキ主義者は、ジャコバン派の力と勇氣を賞賛した。しかし、ジャコバン派が社会問題に無関心であったことを批判した。彼らは、一七九四年のコミューンを評価し、フランスの地方よりもパリを重視した。トリドンによると、民主派の重大な失敗は、力を侮辱し、合法性にこだわったことである。革命はフランスのためにパリによっ

て、すなわち、その国の最も進歩した知的な地域によって行なわなければならない。

この知的なるものを強調する考え方に最も喜んだのは、小さな新聞が次から次へと現われては消えるカルチェーラタンであった。そうした新聞の中でもとくに重要なのは、約一〇紙であった。例えば、ヴァシエロが寄稿していた『未来』、ヴェルモレルの三紙、クレマンソーとゾラが書いていた『労働』、そして、マルクス主義理論を解説した最初のフランス語の新聞であるシャルル・ロンゲの『左岸』が重要である。ロンゲ自身はまだブルードン主義であった。だが彼は、ラファルグがマルクス主義を説明する一連の記事を書くことを許した。

(四) 皇帝の譲歩

一八五九年、皇帝は共和派の亡命者すべてに無条件の恩赦を与えた。亡命者の多くはその恩赦を利用した。ただルドリユ・ロランは、その恩赦令に該当しておらず、また、ルイ・ブランは、一八七〇年まで外国に滞ったので帰国しなかった。皇帝のこの譲歩に続いて、一八六〇年にも新たな譲歩が行われた。すなわち、同年の勅令により立法院は議事録を公開し、議会の奉答文を提出し、修正案を提案することが認められるようになった。一連の譲歩は、当初予想されたよりもはるかに重要な結果をもたらした。

立法院内の共和派は、この譲歩によって公然と政府を攻撃できるようになり、人々に自分たちの反対意見を訴えることができるようになった。共和派はそうした運動に確かな手応えを感じ、希望を大きくした。昔ほど陰謀にたよることをしなくなった。一八五二年から一八五九年にかけてさかんに行われたが、それほど効果をもたなかった革命的な行動は、だんだん行われなくなっていった。

ただブランキは、おとなしくしていらなかった。彼は他の政治犯と同じように恩赦によって釈放されていた。彼は暴力による陰謀を企て、一八六一年六月、再び裁判にかけられ、獄中につながれた。彼の陰謀にはごく僅かな労働

者しか加担しなかった。翌年、もうひとつの陰謀に対する裁判が行われた。五四名の帰国した亡命者が、皇帝の誘拐を企てた疑いで告訴されたのである。この二つの裁判の証拠は薄弱であった。だが警察にとっては、共和派と社会主義者はまだ暴力を信奉している、ということこそ世に喧伝できればそれで充分であった。

ナポレオン三世は、彼の統治の中頃、対応に苦慮する立場に遭遇した。彼のイタリア政策が教会を激怒させたのである。ナポレオン三世は、イタリア人がローマを取得するのを阻止したが、彼のその政策は、イタリアの統一を可能にし、しかもローマはその統一イタリアに統合されることになってしまった。彼が、ローマ法王の領地を思い起こさせるものを擁護している限り、教会は決して皇帝を見捨てなかった。しかし教会は、ナポレオン三世に対する信頼を失はせや喪失したのである。

その結果、ナポレオン三世は教会以外の支持者を求めなければならぬということを実感した。農民大衆が彼の支配を受け入れ、彼が農民に投票を依頼したので、農民は彼に投票したが、それでも十分とはいえなかった。農民は敵に回すところだったが、友人としてはたよりなかった。

フランスで、教会の他に政治的な重要性をもつ唯一の道徳的勢力があったが、それは共和主義であった。皇帝は、最後のいくつかの選挙で、共和派に投じられた票が少いからといって、自分の立場が安全であるとは思わなかった。彼は選挙というものは、そうした失敗を犯すような形になっているものであるということを知っていた。共和派はその力を誇示することはできなかったが、実力は十分あった。ナポレオンは、共和派と権力を分担することは望まなかった。ただ彼は、のちに自分が共和派との同盟を必要とするようになった時には、共和派の方が自分に好意を寄せてきたという形にしたいと思った。そのため彼は、共和派に対しては政治的な懐柔をはかることが賢明であると考えたのである。

(五) 皇帝の側近たち

モルシー、ペルシニー、そしてナポレオン君公らのようなナポレオン三世の側近たちは、ナポレオン三世が自由派や共和派の支持を得られるように望んだ。とくにナポレオン三世のいとこのナポレオン君公は、皇帝一族の中でも最も進んだ考え方の持ち主で、皇帝がもし望むならば、都市の労働者を味方に引き入れるべきだという考え方をもっていた。革命的な信条の中で大変に苦しみ、しかもそこから得るものがほとんどなかった人々に対して、父親のような関心をもってくれることは、味方が全くいない時に味方になってくれるようなものである。結局、労働者たちは、共和主義運動の戦う翼である。彼らは味方しておくだけの十分な価値がある。しかも彼らは貧しいので、援助の量は少なくとも、長く続けることができる。こうした考え方は悪いものではなく、君公も、彼が労働者に対して関心を寄せる十分な動機としていたのである。

皇帝の友人には、この他外務大臣ウォルスキー、警視総監ルエルがおり、それに妻を加え、彼らが皇帝の助言者となった。彼らは皇帝に、絶対主義政府やカトリックとの同盟を維持するように助言した。共和派は、たとえ玉座の退位ではなくても、権力の放棄にならないような譲歩には満足しないであろう。皇帝の助言者たちは、一回譲歩すればさらに譲歩しなければならなくなり、最後は全てを失うだろうと恐れた。そうではなく、もし皇帝が毅然たる態度を取り続ければ、僧侶たちは、イタリア人をローマに入れさせないことができるのは皇帝だけであるということを知っている。皇帝を見捨てるようなことはしないであろう。ナポレオンは、どのような助言を採るべきか決心がつかなかった。彼はすべての権力を自分のもとにとどめておきたかった。しかも、強力な友人の援助をあてにできるように望んだ。それだけに教会の頑固さと恩知らずには腹が立った。とはいえ彼は、僧侶を敵に回すことはできなかったのである。

さらに彼は、最近共和派に与えたものを、共和派から取り上げることがあえてしなかった。彼は共和派の友情を買

うのに、わずかな費用しか払わなかった。それだけにもし彼が、支払ったものを取り上げるようなことがあれば、共和派はこれまでに彼を嫌悪するようになるであろう。彼はなす術を見失った。彼はあたかも、もともと意図していたかのようにあっちへ行ったり、こっちへ来たりした。彼は自己の弱点を自覚したが、それはたちまち他人の知られるところとなった。国民の圧倒的多数から熱心な支持を受けていたとはいえ、それは決して、彼にとって教会の不信や共和派の敵意や侮辱を埋め合わせるものとはならなかった。

(六) 一八六三年の選挙

共和派の帝政に対する反対は、一八五七年までは表面に出なかったが、いつか革命を起こそうとするものであった。その後一八六三年まで、それは政治的というよりも文化的なものであった。一八六三年に野党は、政治的な性格を第一義とするようになった。その年の総選挙で、官選候補制であるにもかかわらず、パリで共和派が勝利を収めた。共和派は首都で八議席を得た。九議席目は、同じく帝政に反対するティエールであった。約七二五万人が投票に行き、そのうち五三〇万人が官選候補者に投票し、野党票は約二〇〇万票であった。

当時フランスには、人口四万人以上の町村は二二あった。そのうち野党よりも獲得票数が多かったのは四つ（ルワン、アンジェール、ストラスブール、オルレアン）だけであった。ナポレオンに反対する派のいくつかは王党派であったが、大半は共和派であった。都市部では、共和主義の力が表面化し、それはかつての勢いを取り戻していた。ただ表面化したといっても共和派の力は、政府を有利にするような画策であったので、おそらく実力を発揮できないのではないかと思われた。

選挙の結果は、皇帝²とその側近に大きな衝撃を与えた。モルニーとナポレオン君公は、議会议体制、自由体制へと移行しなければならぬ時が来たと考えた。彼らは、教会は怒っており、それに執念深い、と言った。教会の僧たちは、

農民には官選候補に投票するように勧めていた。しかし、教会の高僧たちは皇帝のイタリア政策を激しく批判し、彼らの支持を高い値で売りつけようとした。こうなると左翼勢力が将来の鍵を握るようになってくる。後になって余儀なく譲歩させられるよりも、今、潔く譲歩しておくことの方が賢明であった。

だが他方、皇后とルエルも皇帝に劣らぬほど頑なであった。イタリア人をローマから排除しておけるのは皇帝だけであった。そのため皇帝にとって皇后が必要であるように、教会にとって皇帝は不可欠の存在であった。しかも、共和派と社会主義者は、教会にとってこれまで以上の激しい敵となり、宗教を脅かすものとなった。皇帝は、今や反聖職者や自由思想家や無神論者などから教会を守らねばならなくなっていたが、共和派はその皇帝にとってよりも、教会にとって危険な存在になった。ナポレオンの二つの顧問機関は彼に真実を告げた。しかし、それらの機関もまた、状況はどちらかの道を選ばなくてはならないようになるとはいえ、どちらを選択しても、彼にとっては危険であるということを深刻に受けとめていなかった。共和派を永久に抑圧するというようなことは果たして可能だったのだろうか。

皇帝が警察と軍隊の力により、しかも教会とは不即不離の関係を続けることにより、フランスをいつまでも統治するということができるのであろうか。かといって、もし彼が共和派の望んでいる自由を共和派に与えたならば、共和派はどれ位の間、彼に我慢したであろうか。エミール・オリヴィエやダリモンなど、何人かの共和派は、同情しながら皇帝の逡巡を見守っていた。だが、彼らよりも実権をもっていた指導者たちは、決して皇帝と和解しなかった。

ナポレオンは、一八六七年一月まで迷い続けた。その年彼はオリヴィエを呼び、自分は自由帝政に移行することに決めたこと打ち明けた。ただ彼は、それは徐々に行い、決して自分の脆弱性のためにそうするのではない、とも告げた。実際自由体制への移行はゆっくりと行われた。帝政が、議会主義的な、民主的な王制へと転換するには三年の歳月を要したのである。

(七) 労働者への対応

一方、共和派、王党派、ナポレオン君公は、労働者を味方に引き入れようと激しく競い合った。彼らは、今やるべきことは協同組合を、すなわち、自分たちの信ずる自由経済と矛盾することのない制度を充実させることである、といった。この制度こそが、労働者に実際の利益をもたらすと信じていた。一八六六年、皇帝は「生活協同組合のための基金」に五〇万フランを寄付した。皇帝の君公は、三〇万フランを「リヨン機械協同組合」に寄付した。オドリフェット・パスキやプログラのアルベル公のような王党派は、協同組合の合法性を証明するパンフレットを書いた。共和派は、協同組合運動を活気づけるために、少なくとも三紙の新聞を発刊した。独裁的な警察国家はまだ存続していたとはいえ、時代は大きく変わっていた。一〇年前ならば、労働者を組織化するような計画は、たとえその目的が差障りのないようなものであっても、国家に対する犯罪とみなされたのである。

ナポレオン君公は、労働者のためにとくに熱心に行動した。彼の友人の中にアルマン・レヴィイがいた。レヴィイは青年時代によく社会主義者や共和派のクラブに出入りしていた。当時から彼は、いくつかの高貴な家庭の家庭教師をしており、まじめな人物であった。彼は『希望』という新聞を発刊し、その中で「国家の自己決定」や「皇帝民主主義」の原理を説いた。一八六〇年代の初め、彼は古くからの自分の労働者の友人たちと接触するようになり、彼らに、皇帝政府が認めるような労働者の組織を作ったかどうか、と説得していた。彼の試みは成功したとはいえなかった。

しかし、一八六二年夏、ロンドンで開催される万国博覧会の直前、レヴィイがナポレオン君公に、ロンドンに労働者の代表を派遣したらどうか、それは良い手です、と説得した。『希望』の編集員をはじめ何人かの労働者たちが、皇帝とナポレオン君公に、それぞれ労働者の代表をロンドンに派遣してくれるように依頼の手紙を書こうということに合意した。皇帝はその考えに賛成し、代表は労働者自身を選んだ。皇帝は代表団に二〇万フランを寄付した。約二〇〇人の労働者がロンドンに向かったが、まさにその途上で、国際労働者協会設立の提案がはじめて出されていたので

ある。フランスの代表団はロンドンから戻るとすぐに、ナポレオン君公との関係を清算した。

翌一八六四年、何人かのフランスの労働者の代表が、今度は政府の援助なしに再びロンドンへ赴き、ポーランドに対するロシアの扱いに抗議する集会に出席した。一八六四年九月二六日、聖マーチンホールで開かれた集会で、フランス人の労働者たちは正式に「国際労働者協会」の設立を提案した。その提案は受け入れられ、新協会の綱領案を作成するための委員会が作られた。協会の規約、とくにその前文は、起草委員会の委員の一人、カール・マルクスの考えが反映された。しかし、当時協会に参加した労働者の間には、世界中の労働者たちが自分たちの階級の運命を改善するために団結しよう、という信条を共有するような気配はなかった。一八六四年にロンドンに集った代表団一〇人のうち、マルクスの理論が他の社会主義者の理論とどのように違うのかを知っている人は誰もいなかったのである。

(八) 第一インターナショナル

第一インターナショナルのパリ地区は、すぐに当局の目にとまるところとなった。警察のこの行為と温情的な態度のため、インターナショナルは、ブランキ主義者と過激な共和派に対しては不信感をもつようになった。もっともパリ地区の指導者たちは、もともとは政治的には共和主義であった。しかも彼らは、共和派の新聞の中で、自分たちの見解と意見を発表した。警察の温情はすぐに限界に達した。というのも、パリの地区が帝政の後楯になることをきっぱりと断わったからである。

まず、インターナショナルはフランスでは急速には発展しなかった。しかし、一八六七年二月、青銅職人たちがストライキを行った時、パリ地区は適切な援助をストライキをしている労働者たちに与えたが、その行為はフランス中の労働者たちを驚かせ、喜ばせた。パリ地区の有力なメンバーであるトールンはロンドンへ渡り、ストライキ中の人々に対する義援金を募った。労働者たちのこのような国際的な連帯は、雇用者にとっては全く予期しないことであり、

彼らはたちまちストライキを行っている労働者たちに屈服した。この偉大な勝利によって、幾万もの労働者がインターナショナルに参加することになった。労働者たちが、どこであろうとストライキを決定すると、労働者の団体は、それがすでに結成されているものであろうと急拠作られたものであると、いづれにせよ、インターナショナルに参加させて欲しいと希望した。頻発するストライキは大きな結社をも増加させ、一八七〇年までにフランスの組合員数は、二五万人に昇った。

インターナショナルは、当初ジュネーブとローザンヌで大会を開催していたが、そこでの参加代表団の多くはフランス人とスイス人であり、労働者の共同組合に好意的な決議案を採択した。一八六八年九月のブリュッセル大会までは、代表団の多くは、集められた集合的ものではなかったが、その大会では、フランス人とスイス人が圧倒的多数を占めた。それでもインターナショナルのフランス地区は、決して圧倒的な集合的団体とはいえなかったのである。

一八六七年末、インターナショナル・パリ地区の指導者たちに対する最初の裁判が行われている間に、事務局が設けられ、業務が開始された。当時裁判を受けていたトールンとその友人たちは、ブルードン主義であった。彼らの後継者たち、なかでもとくに活動的なヴァルランは、大きな集合的な組織を作ろうという考えの持主であった。インターナショナル・パリ地区の事務局は、フランスの他の事務局とは比較にならないほど重要だったので、指導層におけるこの考え方の変化は重大だった。しかし、だからといってパリ地区が集団主義的になったわけではなく、むしろ他の地区の方がそうした傾向は強かったのである。

フランスの労働者たちは、これまで以上に頻繁にストライキを行った。彼らがインターナショナルから期待し、また得たものは、自分たちが必要としている援助をすぐ手にできることであつた。彼らは理論について議論するよりも、この援助が得られるかどうかに関心をもっていた。彼らの多くは、おそらく、少なくとも次のような曖昧な意味で、まだブルードン主義であつた、といえよう。すなわち、社会は変革されるべきであり、強大になり過ぎた国家は破壊

されるべきであり、できる限り労働者に自由が与えられなくてはならない。これが彼らの信条であった。彼らが理論を顧みなかったからといって、インターナショナル・フランス地区が困ることはなかった。同地区は繁栄した。その隆盛は政府を不安に陥れた。第二帝政が崩壊する前の、一八六八年と一八七〇年に、インターナショナルの指導者たちに対する裁判が二回行われた。

第三節 畏にかかり負傷した帝政

(一) 共和派の追求

海外での大会の決議がどのようなものであれ、インターナショナルはフランスでは、つねに理論よりも実践重視であった。そのため、他の共和派や社会主義者の組織の間では人気がなかった。当初はインターナショナルと友好的であった穏健共和派も、やがてインターナショナルが中産階級を脅かし、そのため彼らを、援助を求めて皇帝の下に走らせてしまうのではないかと危惧するようになった。ブランキ派は、革命を推進するよりもストライキの支持に関心を懐いている結社を馬鹿にした。ジャコバン派は、自分たちのことを社会改革派と呼んでいたが、しかし、彼らはむしろ一七九三年の伝統に忠実で、かつ政治に関心をもっていた。

一八六七年から皇帝の退位までの間に、野党共和派は、立法院で、出版物で、また公共の集会で、自信を強め、厳しさを増し、量的にも拡大していった。一八六八年三月から検閲は緩和され、集会を開く許可が簡単に得られるようになり、代議員が閣僚に質問することが認められるようになった。しかし、公共の集会での発言者や出版物の言葉があまりにも過激なため、やがて警察は、法律が緩和されて許容度が広げられていく回数ごとに、その法律を破る犯罪者を告発していった。

しかし、当初の成果をあげられずに落胆した当局は、共和派をできる限りきびしく取り扱ったが、いったん与えてしまった譲歩は、取り返すことは困難であった。パリの急進的な新聞、とくに『覚醒』のドゥレスクルーズ、『灯』と『ラ・マルセイエーズ』のアンリ・ドゥ・ロッシュフォールは、革命の時でなければ見ることでできないような激しい口調で、政府と皇帝の家族を侮辱した。警察と軍隊は、まだ法と秩序を維持できたし、農民は従順で教会は友好的であった。体制の基盤はまだ堅固に思えた。しかし人々が、帝政の安全を信じるためには、そうした事実が確かにそうであるか、つねに確認してみる必要があった。もし彼らがそれらの事実を忘れ、ただパリや大都市や工業地域で起こっていることだけに目を奪われたならば、帝政の余命は幾許もないとの結論に達せざるをえないであろう。

(二) 共和派の形態

皇帝に敵対している多くの共和派の集団があった。それらは決して結束した野党という形を取らなかった。共和派の組織とか、共和派間の同盟関係とかいう観点ではなく、彼らのとった全般的な行動という視点から共和派をみると、それは主に五つの形態に分けられる。

① 開放左派と閉鎖左派

第一に、立法院内での「開放左派」と「閉鎖左派」である。両方ともそれぞれ議会外に支持する新聞、宣伝班、組織をもっていた。穏健共和派の中でも最も穏健な人々は「開放左派」に属し、彼らは個別的な目標では政府と協力してもよいと考えていた。しかし、エミール・オリヴィエのような人々には、帝政が本当に自由主義的になれるのかどうか疑わしかった。そのため彼らは、理論的にはあらゆる種類の王政には依然として断固反対であった。

ただ同派の穏健性は、ティエールのようなかつてのオルレアン派にとっては、魅力的であった。ティエールの考え

は、議會政治はボナパルトが玉座にいる限りは決して安全とはいえない。かといって男子普通選挙制はもはや廃止するわけにはいかない。ブルボン家の王政が復活することはありえない、という点にあった。これら穩健共和派の人々は、ティエールが数年後に言うようになる、「共和政こそがフランスを最も分裂させることが少いだらう」との言葉をすでに信じていた。

「閉鎖的な左派」は、前者よりも色々な考え方が混ざった集団であった。その名前は、彼らがいかなる条件であろうとも、皇帝政府とは一切協力しない、というところからきていた。同派の何人かは、ジュール・シモンのようなまさに穩健な共和派であった。彼らは、一二月の男、ルイ・ナポレオン・ボナパルトと関係のある事には全くかわりたくないとの嫌悪感を保持していた。さらに、心情的には全く穩健である他の人々にいたっては、ジャコバン派や社会主義者といっしょに仕事をしても問題ないと言っていた。同派の中で最も有能なのはガンベッタであり、彼の行動はそうでもなかったが、発言はかなり左派よりであった。ガンベッタやその考えに近い人たちは、自分たちのことを社会改革者と呼んでいた。しかし彼らは、自分たちは労働者のために本当は何をしてあげたいのか、正確にはつかみかねていた。ともあれフランスの共和派の大多数は、以上二つのグループのうちのいずれかを支持していたのである。

以上二派のよってたつ原理は、まとめると以下のようになる。すなわち、個人の自由、議會政治、機會の平等、警察や行政府のあらゆる種類の抑圧の嫌悪、反教権主義、そして軍に対する不信である。こうした原理は、一八四八年の穩健派の原理と全く同じというわけではなかった。男子普通選挙制はすでに敷かれていた。反教権主義と專業軍隊に対する嫌悪感は、今や二〇年前よりもさらに強くなった。社会改革への信条もあった。何人かの人が言うような、「その信条は何の意味もない。なぜならば、『開放左派』も『閉鎖左派』も社会改革についての詳細な計画をもっていないからである」と言うことは理不尽である。そのような改革は必要であるということをはっきりと言うことは、貧乏人に対する社会の義務を公言することであり、とくに影響力のある大きな党派が、そのことをはっきりと繰り返し返

し認めることは、つねに重要なことである。

もし第三共和政が、その統治のはじめの一〇数年間、労働者のためにあまり働けなかったとするならば、その原因は、ひとつには、共和政自らが王党派と戦わなくてはならなかったこと、また、コミューンの思い出をその後の生き方で償わなければならなかったことにある。のちに、保守派から共和国政府を引き継ぐことになる「開放」および「閉鎖」左派の指導者たちは、一八七一年のコミューン政府には、その誕生の時から反対していたのである。

② ジャコバン派

立法府にかなりの代表を送っていたそれら二つの党派の左側に、さらに三派があった。ジャコバン派、インターナショナル・フランス地区、ブランキ主義者である。一八六〇年代後半のジャコバン派は、いくつかの点で第二共和政の彼らの先駆者たちとは違っていた。ジャコバン派は、一八四九年から五一年にかけて、共和主義への転向者を数多く出した急進派よりも、もっと過激であった。その当時の地方の転向者の多くは、すでにガンベッタ派の人々から指導権を奪っていた。ただ六〇年代後半のジャコバン派は、その殆んどが大都市におり、とくに、パリが強力であった。一八五一年のクーデターとルイ・ナポレオンの警察体制を見たジャコバン派は、フランスは分権化されなければならぬ。最小の行政単位、コミューンが強化される必要がある。そして、最大の行政単位である国家は、できるだけ弱められるべきである、と確信した。

ジャコバン派にとっては、男子普通選挙制も議会政治もまだ不十分であった。ルイ・ナポレオンは、フランスの絶対的支配者になるために、その両方をうまく使いこなせるということを示した。これまでにないほど反抗色を強めたジャコバン派は、軍隊を廃止して、それにかえて市民軍を設け、そして、全国一律の累進課税制の樹立を望んだ。彼らはまた、社会改革を強く要求した。この社会改革こそ、ジャコバン派がラスパイユのような人々と和解できる点だっ

たのである。というのは、ジャコバン派はロベスピエールや山獄派を尊敬していたが、ラスパイユらはそれを嫌っていたからである。ジャコバン派の中で最も有名なものは、ドゥレスクルーズとロッシュュフォールであったが、二人ともパリで大変人気のあるジャーナリストであった。フランス正規軍がプロシアに敗けた時、二人はその戦争は最後まで戦われるべきであると望んだ。過酷な課税が、約八〇年前、プロシアから共和国を救ったように、今回もそうなるであらうと確信していた。ドゥレスクルーズもロッシュュフォールも、ともにパリ・コミューンを支持したのである。

③ インターナショナル・フランス地区

インターナショナル・フランス地区は、極左の三つの集団の中でも最も革命的ではなかった。フランス地区の指導者たちは、労働者による議会政党を作ろうとしたがうまくいかなかった。彼らの唯一の候補者は、一八六九年の選挙で破れた。労働者たちは、自分たちの組合闘争ではインターナショナルからの援助を求めた。しかし、政治的な指導性については、それをあてにできなかった。どのような場合であれ、フランス地区の指導者たちは、労働者を指導する力に欠けていた。すなわち、労働者を団結させ、協力させるといふ自分たちの目的に敵対する原理に対して、どう対抗するかということについては分裂していたのである。しかしパリ地区の指導者たちは、パリ・コミューンでは重要な役割を果たしたのである。

④ プランキ主義者

プランキ主義者は、当時、依然として残っていた職業的革命家であった。他の人たちは、階級闘争は理論的な問題でしかないとしていたかも知れないが、プランキ主義者だけは、一八六七年から一八七〇年の間こそ、フランスで暴力革命が成功する絶好の機会であると信じていた。プランキ主義者たちは、当時、自分たちは共産主義であると公言

していた。すなわち、彼らは財産の共有を信じていたのである。

しかし彼らは、当時のフランスにどのようなようにして共産主義を樹立するかについては、具体的な考えをまだ固めていなかった。彼らの精力は、ただいかに革命を成功させるかということだけに注がれた。ブランク主義者たちは、依然として地方よりもパリが、また、農村よりも都市が優位性をもっていると思ひ込んでいた。そのため彼らは、**抽象的な**民主主義には何の関心も示さなかったのである。

ところが、一八四八年六月の労働者の敗北を見て、彼らは高度に中央集権化された行政では、もはやパリだけでフランスを左右することはできない、ということを学んだ。そして今や彼らは、パリで行われていることを、フランスが押しつづすようなことは許されないのではないか、ということに関心をもつようになった。ジャコバン派のようにブランク主義者も分権化の首唱者になった。一八七一年の革命的コミューンがパリに樹立された時、彼らは存分に自分たちの本領を發揮したのである。

(三) 帝政の崩壊

一八六九年五月、第二帝政最後の議会選挙で、政権党は四四三万三千票。これに対して野党は三三五万票を集めた。野党票の大半は共和派が獲得した。共和派はパリで圧勝し、政府与党は地方で票を集めた。皇帝は、前々からこのまま進むことに疑念を懐いていたが、もはやあまりにも手遅れとなり、引き返すこともできなくなってしまっていたのである。

一八六九年九月六日の勅令は、立法院に法案提出権や閣僚に対する無条件の質問権を与えると共に、議会政治の本質に基づいてその制度を再建した。それでもナポレオンはまだ迷っているように見えた。すなわち、同年末まで彼は、立法院の信任をえていない閣僚を通してフランスを統治しようとした。だが十二月二七日、彼は最後の譲歩を行った。

エミール・オリヴィエに組閣を命じたのである。一八七〇年一月二日、フランスは大国の中で、唯一民主的な議会王政になった。それでもナポレオンは、共和派に気に入られるようになることを望みえなかった。共和派は時がきた時、ナポレオン一世の罪をその息子には負わせないということを決めていたが、それにもかかわらずナポレオン三世については、決して許すことはできなかった。彼の王朝はまだ存続するかも知れない。これこそが病気の男にとって最大の希望であるに違いない。だが不幸にも、自由帝政が最終的に成立して数ヶ月もたたないうちに、フランスはプロシアとの不幸な戦争に巻き込まれていったのである。

注

(1) 何人かのフランスの哲学者たちは、「物質主義」であった。しかし彼らは、フランス人に大きな影響を与えた人々ではなかった。パスカル、フェネロン、ヴォルテール、ルソー、サン・シモンそしてフーリエのように、ブルードンも心情的にはモリストであり、社会を厳しく批判し、勇気と知的誠実さを尊敬していた。

(2) 選挙を私物化している独裁者は、同じく選挙を自分流のやり方に行うとしている。彼は自分が得た票数には関心がなく、自分を否定しようとする票数を気にした。この点では彼は賢明である。というのは、彼の専制政治は、勇気のある人と馴らしやすい人とを分離したからである。彼は、彼に公然と反抗しない人々の忠誠よりも、彼に歯向う人々の憎悪を確実にあてにできるからである。

※本書が、JOHN PLAMENATZ, *The Revolutionary movement in France 1815-71* (LONGMANS, GREEN AND Co, LONDON・NEW YORK・TORONTO, 1952) の翻訳である。章・節以外の小見出しは訳者がつけた。注も最後にまとめた。(一)は、「序論・第一章 大革命」、(二)は、「第二章 復古王政」、(三)は、「第三章 七月王政」、(四)は、「第四章 第二共和政」の前半部分(一)とする)、(四)は、「第四章 第二共和政」の後半部分(二)とする)、(五)は、「第五章 第二帝政」の前半部分(一)とする)である。次回は、「第六章 パリ・コミューン」である。